【研究課題】
東京都 23 区内における終戦後および現代における心中、無理心中の発生状況についての研究

研究期間：２０２０年１２月２８日～２０２３年３月３１日

戦後復興後の 1950 年代前半、2 人（特に若い恋人）が遺書を残して一緒に自殺してしまう「心中事件」が比較的頻繁に発生した。1954 年から 1956 年の 3 年間に、東京 23 区で記録された自殺者は 5466 人で、そのうち double suicide は 79 例、158 人の死亡を認めた。この double suicide（自殺による死亡の 2.89%）では、65.8%が恋人、29.1%が夫婦であることが明らかにされた。一方、現代のデータでは、恋人同士の心中は 15.9%と大きく減少し、夫婦間の心中は 48.8%と増加している。戦後復興期における心中率の高さは、若い世代が「恋愛結婚」と伝統的家族制度を両立させることの難しさ、とりわけ戦後急速に変化した価値観による結婚問題やストレスを反映していると考えられる。1954 年から 1956 年にかけての心中事件と現代の心中事件の違いは、平均年齢が若いということである。また、1954 年から 1956 年にかけての心中者の死因は、青酸カリや催眠剤による中毒が多く、現代では一酸化炭素中毒や縊死が多いことも大きな変化である。1950 年代と現代の日本の社会・経済状況との関連で、心中事件に関する類似点と相違点を考察した。